

「土づくり」と「健苗育成」で、 気候変動に負けない米づくりを！

◎土づくり資材の積極投入

- 令和5年の**猛暑でも毎年土づくり資材を連用している圃場では品質低下が軽減**されました。気候変動に負けず、安定的に米の品質・収量を確保するためには、「土づくり」は必須技術です。
- 特に、**ケイ酸資材は①根の活力維持、②登熟能力の向上、③いもち病抵抗性の向上**の効果が大きく。土壌pHの改善にも有効です。積極的に施用しましょう。
【施用の目安】ケイカル 120 kg/10a
- 耕土深が浅くなっていませんか？土壌からの養分の供給力増加や、登熟不良・品質低下軽減のため、**耕土深 15cm** を目標に耕起を行いましょう。

◎育苗期間の温度・水管理

- ハウス内および苗床（被覆資材下）の両方に温度計を設置し、温度確認をこまめに行いましょう。



【低温対策】

- ・保温性の高い資材で温度を確保しましょう。低温時に遮光性の高い資材を使用する場合は苗床の地温が上がらず、出芽に時間を要する場合がありますので注意が必要です。

【高温対策】 ～ハウス内の気温が40℃を超えるとわずか30分でヤケることがあります～

- ・晴天時は高温障害が発生しやすいので特に注意が必要です。温度が上がる前に早めにハウスを開放する、遮光資材を使う等の対策を取りましょう。
- ・保温マットを使用した場合、気温が高い日は苗床の温度が急激に上昇することがあるため、早めの換気や保温マットを除去する等の対策が必要です。

【育苗期間の温度管理】

	昼間	夜間	注意点
出芽時	30～32℃		○無加温出芽は出芽を揃えることがカギ。きめ細やかな管理を行う。
緑化期 (出芽後2～3日)	25℃	15℃	○外気温が25℃以上の日は苗ヤケに要注意！早めにハウスを開ける。
緑化期以降	20～ 25℃	8℃以上	○低温時には保温に努める。 ○霜が予想される場合は早めにハウスを閉める。

- かん水は午前中に1回が基本です。夕方からのかん水は根張り不良となるため避けましょう。
- プール育苗では、1.5葉期頃から入水し（上限は床土の高さまで）、ハウスを開放します。2葉期以降は、育苗箱の上1cm程度の水深で常時湛水とします（最大でも草丈の半分以下）。
- プール育苗は苗が伸びやすいので、夜間が5℃以上の場合は、昼夜ともハウスを開放し、ハウス内気温を低めに管理します。**（低温・降霜が予想される場合は、ハウスを閉めるなど保温管理を徹底。）

◎ 育苗期間中の病害対策

○出芽を揃え、温度管理やかん水を適切に行い、病害を発生させない環境づくりが大切です。
カビが発生したり、苗の生育に異常がみられる場合には早めにご相談ください。

【育苗期間中に発生する病害と対策】

病原菌	主な症状	発生条件	発生抑制のポイント
リゾプス	覆土を覆う白いカビ	・ 出芽時の 高温多湿	・ 33℃以上の高温、 多湿にしない
フザリウム	根のまわりに白色～ 淡紅色のカビ	・ 出芽から緑化 期の低温 ・ 湿度の変動が 大きい	・ 低温を避け、 適切な温度を保つ ・ 過湿にしない
ピシウム	カビは見えない、ムレ苗 2葉期頃に葉の萎凋症状		
トリコデルマ	床土や籾の修正に白色～ 青緑色のカビ	・ 水分不足 ・ 育苗土の低pH	・ 33℃以上の高温、 多湿にしない
苗立枯細菌病 もみ枯細菌病	第2葉葉身基部の黄白化、 枯死、坪枯れ	・ 高温多湿 ・ 育苗土の高pH	・ 高温多湿にしない ・ 発生した場合は苗を 速やかに処分



リゾプス



フザリウム



ピシウム



トリコデルマ



苗立枯細菌病
もみ枯細菌病

◎ 品種に応じた基肥量の目安

- 基肥は下表を目安にし、良食味米の生産に努めましょう。
- 一発肥料を使用する場合は、慣行の基肥+追肥の合計窒素量を上限とします。
- 堆肥を施用する場合は、家畜の種類や原料により成分が異なるので、堆肥の特徴を把握し、散布量を決定します。また、**堆肥を施用した場合は、基肥を減肥しましょう。**

表 品種別の基肥量（窒素量）の目安

品種名	はえぬき	つや姫	雪若丸	コシヒカリ	ひとめぼれ	あきたこまち
窒素成分量 (kg/10a)	5～6	3～4	4～5	3～4	4～5	5～6

STOP! 農作業事故

作業前には、機械の点検や危険箇所のチェック等を行い、農作業事故をなくしましょう。

令和6年度 農作業事故防止運動春季強化期間 (4/10～6/10)